

見た人それぞれの見え方で心に刻まれる作品に

**高島市長** 新作映画では芦屋市で撮影をされたということですが、どのような映画ですか？

**河瀬監督** タイトルは、『たしかにあった幻』という、意味として矛盾する言葉を合わせたものにしました。「記憶」と「記録」は似て非なるものです。人の「記憶」というものはその後、自分の中で変化していき、みんなが同じ出来事を体験しても、それぞれの中で異なる形で残るものですよね。一方、「記録」というものは、いつ、誰が見ても同じものです。映画もまた同じ映像を何度見ても同じものが再現される特徴がありますが、私が作りたい映画は観る人々の背景や経験によって、同じシーンを観ても異なる感覚を得ることができるものであって欲しくて、そういった意味をタイトルに込めたつもりです。

**高島市長** 映画にある程度の余白を残したということですか。

**河瀬監督** そうですね。私は人の想像力・イメージネーションを信じています。最近では情報の正確さが求められる社会になり、表現媒体であっても説明を求められますが、表現においては、もっと抽象的であってもよいのではと考えています。観客が自由に解釈できるスペースを作って、自分の記憶と照らし合わせてシーンを感じ取れるようにできればいいと思っています。だれが観ても同じというのではなくて、それぞれの記憶にアクセスし、重ね合わせることで心に深く刻まれる作品になればと思います。

地域性が映画に深みを与える

**高島市長** 今回の映画では芦屋をロケ地を選んでいただきました。私も撮影に参加させていただきましたが、地域に根差した歴史や文化を大事にされているように感じました。地域性となると具体的な話でもあると思いますが、具体と抽象の関係性をどのように表現されたのでしょうか。

**河瀬監督** 「だんじり」などに代表される受け

継がれた文化は地域の「記憶」でもあると思っています。少し不思議なエピソードであってもそれらを登場させることで映画にリアリティーを持たせることができます。

**高島市長** 今回の映画は神戸市や屋久島、フランスなど様々な地域で撮影されている中、芦屋市をロケ地に選ばれた理由はなぜですか。



**河瀬監督** 主人公の職場である病院が神戸にあり、プライベートと仕事の橋渡しをする象徴として電車を使いたかったんです。電車が通り過ぎる音や遮断器の音を時空を超えることや人の表裏を切り替える装置として使いたくて、探し当てたのが阪急芦屋川駅でした。また、芦屋川周辺の景色やサンモール商店街、神社や公園、だんじり祭りなどの地域性も映画に深みを与えたいと思いました。

対話は心の交流

**高島市長** 大阪・関西万博では長い時間をかけてシグネチャーパビリオンを手掛けられました。一対一の「対話」をみんなで観覧するものでしたね。

**河瀬監督** パビリオンはDialogue Theater（ダイアログシアター）と名付けられ、スクリーンの中から現れる人と観客代表の一対一の対話を目撃できるようなシアターを作ろうと進めていきました。私に与えられたテーマは「いのちを守る」だったのですが、守るということは「何かしらの敵がいる」ということです。震災や病気、戦争などありますが、一番怖いのは「人間」だと思います。「対話」で違いを認め合いつなが



兵庫県芦屋市。その静かな街並みと美しい自然が、映画のスクリーンにどのように映し出されるのか？今回、芦屋市で新作劇映画『たしかにあった幻』の撮影を行った映画監督・河瀬直美さんにお話を伺い、映画制作の舞台裏や監督の芸術的ビジョンを深く掘り下

ていくことが重要です。一対一の対話でそれを成し遂げることができたなら世界は平和になるのではないかという希望を込めました。

**高島市長** お互いのことをもともと知らず、二度と会わない関係性だからこそ、心の奥底の話が出てきたのかなと思ったんですが、対話者の変化はありましたか。

**河瀬監督** スクリーンの対話者はオーディションで決定し、実施に向けてワークショップを行いました。ワークショップが進む中で、対話で重要なのは「素直さ」だと感じました。その人が今の自分で、いろいろなものをどれだけ吸収できるかが大事ではないかと思いました。それから、対話中に言葉を取り繕うのではなく、沈黙になる人が素直な人だったりします。皆さんには、「沈黙を恐れないで、沈黙も表現だよ」と声をかけていました。他には「わかる、わかる、それでね・・・」と皆さん人の話にすぐ同意しがちですが、「本当に同意してる？嫌われたくないからそう言っていない？」と声をかけながら「意見が違うということを恐れなくていいんだよ」と話すこともありました。

**高島市長** 沈黙を大切に、とはあまり教わりませんよね。

**河瀬監督** ディベートは勝ち負けがありますが、対話は違う価値観に触れて自分が変わる



特集表紙撮影地

うちぶん(図書館打出分室)

大阪にあった明治時代の銀行の建物を移築し、金庫・仏具商の松山興兵衛氏が美術品の保管に使っていました。現在1階は、図書館分室として使用しています。平成21年に国登録有形文化財に登録。



うちぶん(図書館打出分室)打出小槌町15-9

対談の様子は1月1日～広報番組「あしやトライあんぐる」でもご覧いただけます。



高島 峻輔

芦屋市長

高島 峻輔

たかしま りょうすけ